

青森 消防

AOMORI
SHOBODAN



自分のまちが
好きだから、
自分にできる
ことをする。



消防団の団員はみんな、
普通に暮らす普通の人。
そして、自分のまちが好きな人。



知事メッセージ

消防団が紡ぐ 地域のつながり



青森県知事
宮下宗一郎

「消防団」と聞くと、火災現場での消火活動をイメージしますが、そのためには、地域に根ざした平常時の活動が大変重要です。

火災予防を呼びかけながらパトロールすることで地域の実情を把握し、地域の行事のお手伝いをするなどで地域の人たちと顔を合わせ、つながりを作っておく。

訓練だけではなく、そうした日々の積み重ねが、いざという時の消防団活動を支え、地域の暮らしをより良くしていきます。

みなさんも消防団の一員として地域のつながりを紡いでみませんか。

消防団は地域に「住む人」「働く人」「学ぶ人」によって構成されています。
団員はそれぞれ自分の仕事を持ちながら、
「自分たちのまちは、自分たちで守る」の精神のもと、
住民の安全を守るため、自分たちにできることを日々積み重ねています。



CONTENTS

消防団員インタビュー	P03-14
消防団の活動について	P15-16
報酬等・各種制度	P17-18
消防団へ入団するには	P19-20
消防団車両・資機材の紹介	P21-22



紹介動画はこちら



AOMORI
CITY



えびな
暇なきらり

青森市青森消防団
青桜分団所属
25歳 / 会社員 / 活動歴1年

消防団で
活動した
ある一日





「消防団は新しいコミュニティー。 居心地のいい交流の場です。」

入団のきっかけは？
女性分団のことは
知っていましたか？



蝦名 高校時代、吹奏楽部で観閲式に参加する機会があり、そこで初めて消防団の存在を知りました。もともと地域のために何かできることをしたいと考えていたのですが、それまで消防といえば消防署の人だけだと思っていたので、「そういう役割もあるんだ」と、すぐに入団したいと思いました。その後、知り合いに聞いたりパンフレットを集めたりする中で女性分団があることを知り、自分で申し込みました。

入ってみた印象は？
仕事との調整は
大変ではないですか？

蝦名 私は、平日は会計年度任用職員として市役所に勤務し、土曜日は会社員として勤めているので、消防団活動はできる範囲で参加させてもらっています。行事などで急に行けなくなることもありますが、「じゃあ、次また来てね」という感じでみなさんともやさしくて、すごくやりや

すいし居心地がいいです。

消防団という一つのチームに入ることによって、自分にとっての新しいコミュニティーが生まれたと感じています。それまで知らなかったいろいろな年齢の人と交流できて、楽しいし勉強にもなるところが消防団の魅力だと思います。

消防団員として
取り組みたい活動や
今後の抱負は？

蝦名 市役所の仕事は窓口業務が多く、様々な市民の方に接しているのでも、そこで培ったコミュニケーション力を消防団活動に活かしていきたいと思っています。どんな人にも対応できる自信があるので、防災訓練や実際の災害時の避難誘導なども冷静にできると思います。それから、幼稚園や小学校など、小さいお子さんを対象とした防災教室にも行きたいですね。

また、特に女性消防団については情報が少なく、私自身、入団したいと思ってはもまずどこに行けばいいのかわからなくて自分で情報を集めました。今後は女性分団の存在を多くの人に知ってもらえるよう、いろいろな活動に積極的に参加していきたいと思っています。





HIROSAKI
CITY



さ と う

あ き ほ

佐藤 明保

弘前市消防団
女性分団所属
20歳 / 大学生 / 活動歴1年

消防団で
活動した
ある一日



「大学で学んだことを活かし、 確認する貴重な経験ができます。」



入団のきっかけは？
入団前から消防団のことは
知っていましたか？

佐藤 救急救命士になるための学校に通っていますが、先生から女性消防団の存在を教えてくださいいただき興味をもちました。消防団というと、火事の現場で活動する人という認識しかなかったのですが、女性分団では防災教育などの活動もあるとのことでしたので、地域の方とふれあう機会が多く貴重な体験ができると思い、入団を決めました。



消防団での活動は、
救急救命士の勉強にも
役立っていますか？

佐藤 最初に参加したのが、親子でクイズなどを通じて防災について学んでもらうイベントでした。人に教えるためには自分がしっかり理解していないといけないので、先輩に教えてもらいながら勉強できたのが良かったと思います。これがきっかけで防災についての知識をもっと身につけたいと思い、その後、防災士の資格を取得しま

した。これは救急救命の仕事にも役立つと思います。

また、救急救命については学校で習っているので基本知識はありましたが、消防団員として心肺蘇生法を実際に人前でやって見せるのは貴重な経験で、自分の知識やスキルを確認する場にもなりました。



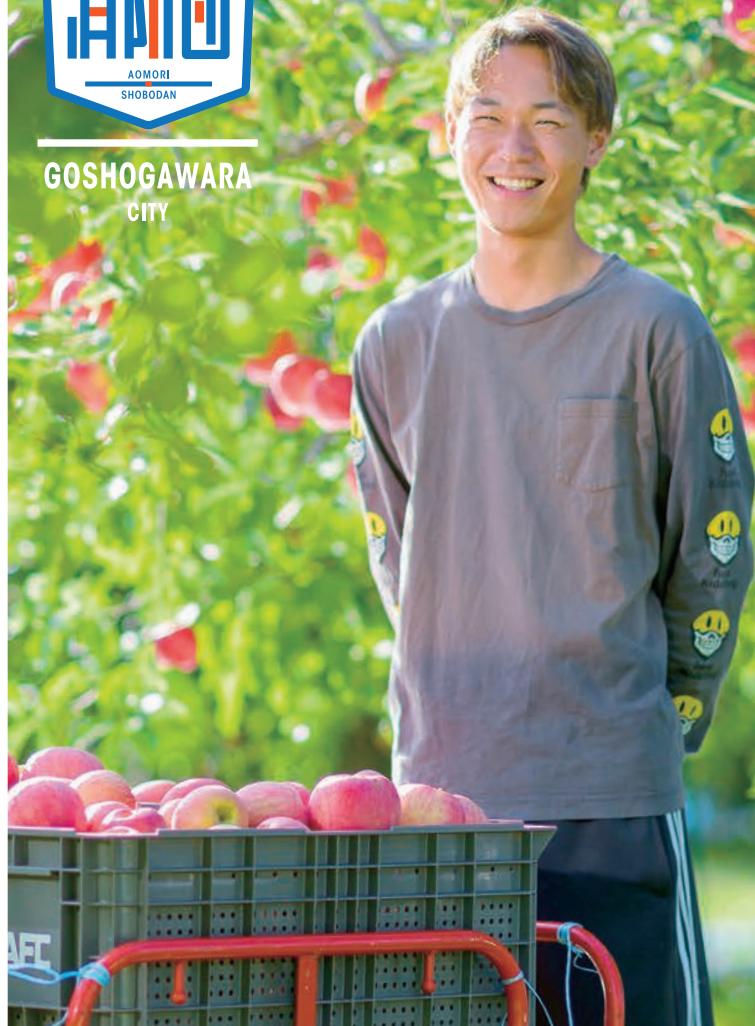
消防団員として
今後どのような活動を
していきたいですか？

佐藤 大雨のときなどはみなさん不安だと思うので、災害時に命を守るために役立つ知識や、準備しておく目安なものなどについて、防災教育を通じて多くの市民の方に伝えていきたいです。いざというとき、みなさんが少しでも落ち着いて行動できるように、私自身がより正確で深い知識を身につけ、それをお伝えることで役に立てればと思います。

また、防災イベントなどを通じて消防団について理解してもらえるように、特に女性消防団の活動内容を広めていきたいですし、学校の後輩たちに対しても、将来的に役立つことが多いということを伝えていきたいと思っています。



GOSHOGAWARA
CITY



く どう し ゆ き や

工藤 寿樹也

五所川原市消防団
五所川原地区第2分団第2部所属
23歳 / 農業 / 活動歴4年





「初めての現場で、 役割の重要さを実感しました。」

農業との両立は
できていますか？
分団の雰囲気は？

工藤 18歳で今の会社に就職しましたが、社長が消防団員で、やってみないかと声をかけてもらい入団しました。消防団については何も知りませんでしたし、とても堅い組織というイメージがあったので、緊張したし不安もありましたが、社長や分団長にいろいろ教えてもらいながら活動を続けています。

農業は朝が早いので、夜の訓練には参加できないこともあります。仕事優先ということで認めてもらっています。社長も消防団員なので、普段から火災についての話をすることも多いです。仕事中に近くで火災があれば管轄外でも情報を集めたりします。ですから、団活動も仕事の一環のような感覚で捉えています。



今も訓練など真剣な場面では緊張しますが、飲み会などは和やかな雰囲気です。入団しなければ絶対知り合わなかったような人とたくさん関わりますし、初めて話す人や、訓練では厳しい人が、こういう人だったんだとわかってくると楽しいです。

実際の災害現場では
どんなことを
感じましたか？

工藤 大雨のとき、冠水した地域の排水作業で初めて現場を経験しました。実際の水害現場はやはりリアルな恐怖感があって刺激が強く、体力的にもきつかったですが、それだけに消防団の役割の重要さを実感しましたし、やりがいも感じました。まだ指示にしたがって動くのが精一杯でしたが、早く先輩たちのようにテキパキ動けるようになりたいと思いました。



特に若い人に向けて
団員拡大のための
アイデアはありますか？

工藤 入ってみないかと誘うより、自分から入ってみたいと思ってもらえるような情報や記事をSNSなどで発信していけばいいと思います。自分も分団で最年少なので、今後いろいろな場面で活動し、それを見てもらうことで、同世代やもっと若い人に消防団への興味をもってもらうように頑張りたいです。



MUTSU
CITY



はまなか

たかひろ

むつ市消防団

川内消防団第8分団所属

37歳 / 自動車整備士 / 活動歴11年
(左 / 妻 真菜美さん)

濱中 貴裕

消防団で
活動した
ある一日



「地域の人とのつながり方の ひとつの形だと思っています。」



関東から地元へUターン
されたとのことですが、
入団のきっかけは？



濱中 Uターン就職してすぐに地元の先輩に誘われました。消防団については全然知りませんが、話を聞くうちに、あまり重く考えず、ここで暮らす者として地域のために自分ができることをできる範囲でやればいかなと。地域で生きていく上での、人とのつながり方のひとつの形と捉えて入団を決めました。

ふだん、どのような活動をして
いますか？
経験された現場は？

濱中 整備士の仕事をしていて、団のポンプ車の整備も会社で請け負っているので、車両担当として日常の点検や運転を行っています。

職場がある川内の分団に所属していますが、住まいがむつ市内なので現場にはなかなか行けないことが多いです。団の人にはそうした事情も理解していただき、活動を続けさせてもらっています。また、妻が消防職員なので、災害があると先でかけて

いくことが多く、その間は私が子どもと一緒にいるなどしながら2人で子育てをしています。

一度、川での溺死事故に遭遇したことがあります。びっくりしましたが、心肺蘇生法など救急救命の講習を受けていたので、冷静に動くことができました。残念ながらすでに亡くなっていましたが、団に入っていなければ、なんとかしなければと思うばかりで何もできなかったと思います。この時から、自分がやっている消防団の仕事は人命に直接関わる仕事なんだと、あらためて感じるようになりました。

団員の拡大に向けた提案、
感じていることなど
ありますか？

濱中 不安だったし大変そうなイメージがありましたが、入ってみたら意外と楽しいという人が多いので、正式な入団の前に体験入団的なことができればいいのかなと思います。その分団の雰囲気もわかりますし。

また、手当や保険などの制度が充実していることはあまり知られていません。そうしたメリットも体験入団の場でもっと知ってもらえれば、入団する人も増えるのではないのでしょうか。





GONOHE TOWN



くりやま とき
栗山 時

五戸町消防団 本部女性班所属
30歳 / 地方公務員 / 活動歴7年



「人に教えるための準備が、 自分の学びになります。」



入団のきっかけは？
女性班の雰囲気は
どんな感じ？



栗山 役場の女性の先輩に誘っていただき、定例会に行ってみたらとても楽しそうな雰囲気でした。同じ職場の先輩がいるのは心強く、役場の人たちも応援してくれましたので入ってみようと思いました。

みなさん年上で、最近までいちばん後輩でしたが、いろいろな年代の方との会話は楽しいですし、消防のことに限らず知識も広がります。

どんな活動
をしていますか？
印象に残った活動は？

栗山 主に幼稚園での防災教室や、町の防災訓練での説明、式典でのアナウンスなどを担当しています。

観閲式では、全員がぴったり揃ってキビキビ動いて、見ている人たちも気持ちよかったと思いますが、やっている私たち自身もとても気分がよく、誇らしくもありました。

また、防災教室は、子どもたちや町民の方との交流自体が楽しいですし、そのための事前の準備が自分にとってとても有益な勉強になります。消防署で救急救命士の人から指導を受けたときは、応急処置からトリアージのやり方まで教えていただきました。触れたことのない分野だったのでとても興味深かったです。

以前は福祉関係の部署にいたのですが、気象警報が出て役場が避難所を開設したときも、消防団で学んだことがとても役に立ちました。

女性団員として
これからの抱負を
お話しください。

栗山 消防団は男性が活動する場というイメージがあると思いますが、イベントなどで広報の役割を女性団員が担っているのを見れば、女性にも活躍の場があることがわかんと思います。

ですから、今まで防災訓練に来たことがない人など、もっと多くの人に参加してもらえるよう、お祭りなど人が集まる機会を利用して活動の場を広げていければいいと思います。それが消防団への理解につながりますし、地域の防災力を高めることにもつながっていくと思います。






HASHIKAMI TOWN



くろさか やすと
黒坂 康人

階上町消防団第1分団所属
34歳 / 医療ソーシャルワーカー /
活動歴5年





「どこより早く現場に駆けつける。 カッコいい伝統をつないでいきたい。」

入団のきっかけは？
入ってみて
感じたことは？

黒坂 隣に住んでいる親戚が現在分団長で、その人に誘われて屯所に話を聞きに行ったところ、地域の知り合いも多く、入ってみようと思いました。

入団前のイメージと違ったのは、活動内容の幅広さ。まだ入団して5年ほどですが、これまで、火災のほか、台風のときの浸水した地区の排水作業や地元のイベントの火災警備など、さまざまな活動に参加しました。

印象に残っている活動は？
入団してから、自分が
変わったことはありますか？

黒坂 真冬の火災現場に出動したときは氷点下で、かぶった水もホースも凍ってしまっていて大変でしたが、全焼の現場を見て、あらためて普段から予防意識をもつことの大切さを思い知りました。こうなってしまってからではもう遅いんだと。起こってしまったらもちろん全力で消火しますが、



起こらないようにすることがより大事なのだと痛感しました。

また、火災予防のチラシ配りなどで各戸をまわって挨拶すると、こちらは知らない人でも、向こうが私を知ってくれていたり、私の父や祖父を知っている人との出会いがあります。あそこの孫か、あそこの子か、がんばってるなど声をかけていただくこともあり、地域の人とのつながりを実感できます。

消防団の魅力は？
どんなときに
やりがいを感じますか？

黒坂 自分は、単純に消防団員はカッコいいと思っています。活動服を着て、ポンプ車に乗って、操作して、ふつうの生活では経験できないこといろいろあります。

うちの分団がすごいと思うのは、どんな現場にもいち早く駆けつけること。海側の地域ですが、山火事にもどこよりも先に現場に行きます。前分団長さんなどは、常に玄関先に必要な装備を準備していて、すぐに屯所に向かったそうです。そうした意識が伝統として代々受け継がれていて、それもまたカッコいいと思います。